

令和4年度

全国学力・学習状況調査の結果と 学力向上の充実に向けて

清水町教育委員会

～全体的な傾向～

令和4年4月に実施した「全国学力・学習状況調査」の結果、教科に関する調査の平均正答率は、小学校では国語・算数が全国・全道平均を下回り、理科では全国平均を若干下回りましたが全道平均と同率でした。中学校では全教科において全国・全道平均を上回り、特に数学・理科においては、全道平均を大きく上回りました。

学習状況調査における児童生徒質問紙で、小学校においては、規範意識、生活習慣や学習習慣が定着し、理科への関心について高い傾向が見られる一方、新聞や読書の習慣、国語への関心について低い回答傾向が見られました。また、中学校においては、生活・学習習慣が定着し、数学や理科の関心についてなど全体的に基準よりも高い回答傾向が見られました。

小学校、中学校ともに普段の勉強からタブレットやスマートフォンなどのICT機器を活用して勉強を行っている傾向が見られました。

清水町では”しみず「教育の四季」”を実践指標として、学校、家庭、地域が絡ぐるみで心をかよわせ感性豊かな教育に取り組んでいますが、調査結果で明らかになった課題を踏まえ、今後も各学校、家庭、地域において、子どもたちの学力向上のための効果的な取り組みを意欲的に充実させていくことが大切だと考えています。

学力 とは

基礎的な知識や技能を習得して、課題を解決するための思考力や判断力、表現力などの能力とともに、学ぶ意欲なども含めたものです。

三つの柱

生きて働く「知識及び技能」

未知の状況にも対応できる
「思考力・判断力・表現力等」

学びを人生や社会に生かそうとする
「学びに向かう力、人間性等」

本調査は、「三つの柱は相互に関係しながら形成されるもの」という考え方のもと、一体的に調査問題を構成したものとなっており、実生活に必要な知識・技能や活用する力等の状況を把握するものです。

また、教科に関する調査のほかに、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面などを質問紙調査で聞きました。

令和4年度 全国学力・学習状況調査

【目的】

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取り組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【調査対象】

○小学校6年生、中学校3年生（清水町は全小・中学校全4校で実施）

【実施日】 令和4年4月19日（火）

【調査事項及び手法】

- 教科に関する調査 国語、算数・数学、理科の3教科
- 質問紙調査 生活習慣や学習環境等に関する調査

小学校 6 年生 調査結果概要

教科に関する調査の結果

平均正答率は、国語・算数・理科において、全国平均を下回りました。

◆ 小学校 6 年生調査問題の趣旨・内容

□ 国語

○ 文章全体の構成に着目して文章を整えたり、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の良いところを見つけたりすることができるかどうかをみる問題など

□ 算数

○ 日常生活の問題を解決するために、目的に応じて、数量の関係に着目し、数の処理の仕方考えることができるかどうかをみる問題など

□ 理科

○ 観察で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができるかどうかをみる問題など

○ 町内小学校 6 年生の学力の傾向

国語・算数において、全国・全道を下回る平均正答率であり、課題が見られます。

理科において、全道平均との差はありませんが、全国平均はやや下回っており、課題が見られます。また、全教科で記述式問題の無回答率が高くなっている傾向があります。

○ 課題と対応

国語・理科において、与えられた問題を分析・解釈し、自分の考えをまとめることに課題があると言えます。

算数については、ある数量の割合や比例関係について求める問題において、全国・全道の平均正答率より低い傾向にあります。

三つの柱の資質・能力を伸ばすために、日常生活の中にある問題に普段から触れ、自分の考えを聞く人のことを考えて工夫してまとめることを意識させることが大切です。

中学校 3 年生 調査結果概要

教科に関する調査の結果

平均正答率は、国語・数学・理科において、全国平均を上回りました。

◆ 中学校 3 学年調査問題の趣旨・内容

□ 国語

○ 聞き手の興味・関心などを考慮して、表現を工夫することや自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる問題など

□ 数学

○ 図形の性質や事象などを数学的に考察する場面において、筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる問題など

□ 理科

○ ばねを押すときの力の大きさとはばねが縮む長さの関係や水の状態変化における温度変化などについて科学的に探究する学習場面において、状態変化に関する知識及び技能を活用できるかどうかをみる問題など

○ 町内中学校 3 年生の学力の傾向

国語、数学、理科の 3 教科において、全国を上回る平均正答率であり、基礎的な知識・技能及びそれらを活用する思考力・判断力・表現力等が一定程度身につけていると言えます。

また、全教科の記述式問題で無回答率が高くなっている傾向があります。

○ 課題と対応

国語において、自分の考えが伝わる文章になるように根拠を明確にして書くことに、数学において、筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することに課題が見られます。

家庭学習に取り組む中で根拠に基づいて自分の考えをまとめること、その際それを聞く人に伝わりやすいように工夫してまとめることを意識させる必要があります。

～調査結果から次のような指導改善の視点が明らかになりました～

◎小学校

国語

◇文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文や文章を整える。

書く相手や目的に応じて、自分が書いた文章を読み直し、整えることができるように指導することが大切です。その際、読み手にとって分かりやすい文章にしたり、自分の伝えたいことをより明確にしたりすることを意識し、推敲する必要性を感じることができるようになることが重要です。ICT 機器等を活用し、推敲することが習慣になるように普段の授業から働きかけることが大切です。

◇文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の良いところを見つける。

学校生活の中で伝え合う経験を積み重ねていくことで、自分の文章の良いところを見つけたり、それを言葉で表したりする指導が大切です。ペアワークやグループワークの中で、対話的な学びの機会を作り出していくことが必要です。

また、教師が話し合いに参加し、質問したり、発言の価値づけをしたりすることで児童に気づきを与えることも重要な手立てです。

★各家庭での実践

本や新聞などの文章を読み、自分の考えをまとめ、タブレット等を用いて友人などと共有して、良いところやもっと工夫できるところを伝え合うことが大切です。

算数

◇数を大きくみたり小さくみたりするなど、目的に合った数の処理の仕方を考察する。

買い物の計算など、日常生活の経験を基に、値段の大小を予想したり、概算して能率的に比較しようとしたりする態度を養うことが大切です。児童が自分の経験を想起して導き出した考えに寄り添いながら、正しく判断するためにはどの方法で概数にして計算すると良いかという問題に焦点化することが大切です。

◇伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを記述できる。

一方の数量のみに着目するのではなく、二つの数量がどのように変わっているかに着目し、一方の量が2倍3倍…となるとそれに伴ってもう一方の量も2倍3倍…になっているという比例の関係を捉え、未知の数量を求めることができるようにすることが大切です。

割合の変化については、児童が経験している日常の具体的な場面と関連付けて考察させることが重要です。数量を倍にしたときだけでなく、半分にしたときなど様々な数量の変化に伴い、割合がどのように変化しているかを児童に捉えさせることが大切です。

★各家庭での実践

家庭での買い物や料理など日常生活の中で、身近にある数量に目を向けて概数の計算や割合の変化を捉えられるように、保護者が児童に対して、積極的に問いかけて考えさせることも大切です。

◇観察などで得た結果を、他者の気づきの視点で分析して、解釈し、自分の考えを持つことができる。

結果を基に結論を導く際に、記録の整理の仕方などを工夫し、お互いの結果を比較する中で、他者の考えを受けて様々な視点から自分の考えの妥当性を検討する学習活動を行うことが大切です。自分だけでなく、他者の考えを交流して実験を実行していくことで、主体的・対話的な学びへと結びつけていくことができます。

◇日光は直進することを理解している。

一人一人が持っていたイメージや素朴な概念などを、既習の内容や生活経験、学んだことと意味付けたり関連付けたりして、より妥当性の高いものに更新していくことで、自然の事物・現象についてより深く理解できるようにすることが大切です。
児童がこれまでに持っていたイメージや概念を尊重しつつ、学習の中で得た知識を自分の言葉で説明できるように理解させる働きかけをしていくことが重要です。

★各家庭での実践

天候や自然の事象へと関心を持ち、日常生活の中から様々な疑問を感じ、それを解決するために予想を立てながら確かめていくことが大切です。

◎中学校

国語

◇自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く。

自分の考えが伝わる文章を書くためには、根拠を明確にすることが大切であり、文章の中に根拠を記述する必要があることを理解して書くことができるように指導することが重要です。

その際、専門的な立場からの意見などを引用する必要があることを理解し、引用の仕方を意識して書くことができるように指導することが大切です。

◇場面と場面、場面と描写などを結び付けて内容を解釈する。

文章の中の時間的、空間的な場面の展開、登場人物の相互関係や心情の変化、行動や情景の描写などに注意しながら読めるように指導することが重要です。

その際、心情を表す言葉に注目してその変化をたどったり、叙述の細かな違いに注意して読み、それぞれの叙述が表している心情の違いを考えたりすることができるように指導することが大切です。

★各家庭での実践

・日頃から新聞や本などを読むことによって、文章の構成や引用の仕方を学んだり、心情を表す言葉や情景を表す言葉など、より多くの言葉を学んだりすることが大切です。

ただ、読むだけでなく、読み解いて理解を深める中で自分の考えをまとめられるようにしていくことが重要です。

数学

◇結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見出し、説明することができる

事柄を数学的に表現することは、後の学習において逆の意味を吟味したり、解の吟味の必要性に気付いたりするなど論理的に考えを進めながら新たな知識を習得できるようにするうえで大切です。

数学の事象から問題を見出し、数学的な推論などによって問題を解決し、解決の過程や結果を振り返って、数量や図形などの性質を見出し統合的・発展的に考察できるようにすることが大切です。

◇筋道を立てて考え、事柄が成り立つ理由を説明することができる。

結論を導くために何が分かればよいかを明らかにしたり、与えられた条件を整理したり、着目すべき性質や関係を見出し、事柄が成り立つ理由を筋道立てて考えたりする活動を取り入れていくことが大切です。

ICT 機器等を用いることで、より様々な視点から図形を観察し、その性質や関係を理論的に考察し表現することができます。他者の意見を共有していくことでより多面的に物事を捉えることができ、対話的な学びの中から自分の考えをまとめていくことが大切です。

★各家庭での実践

・家庭学習の中で、理論的に問題を考察し、自分の言葉で説明できるように取り組むことや ICT 機器等を使って他者と色々な考えを共有し理解を深めることが大切です。

◇飛行機雲の残り方を科学的に探究する学習場面において、地上の観測データを用いて考察を行った他者の考えについて、多面的・総合的に検討して改善できるかどうか。

一つのデータから考察を行うのではなく、複数の観測データを用いて多面的・総合的に検討し、考察の妥当性を高めていくことが重要です。
生徒の様々な考察を肯定しつつ、その他の視点からも考えられるように、生徒同士で考察を共有させたり、新たな考察の手立てとなるように教師から助言をしたりすることが大切です。

◇考察の妥当性を高めるために、測定値の増やし方について、測定する範囲と刻み幅の視点から実験の計画を検討して改善できるかどうか。

自ら考えた考察と他者の考察の妥当性を検討しあう中で、妥当性を高めていくためにはどのような測定値が必要かを考えさせる問いかけが重要です。
測定値を増やすことで、どのような考察・検討結果を得られるのかを自分の言葉で説明できるように理解させることが大切です。

★家庭での実践

・日常生活の中で、身の回りの自然の事物・減少に好奇心を持って、気づきを得られるようにすることが大切です。また、見出した問題があるものと比較したり、既習の内容に関連付けて課題の解決につなげたりと、探求の過程全体を自主的に行えるようになることが大切です。

質問紙調査の結果

小学生は、規範意識、理科への関心等などが全国平均を上回りましたが、算数への関心が全国平均を下回りました。
中学生は生活習慣・学習習慣、自己有用感などほとんどの項目で全国平均を上回りました。

◇質問紙調査の趣旨・内容

学力の状況のみならず、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面に関する質問紙調査を実施し、学力と相関関係等を分析します。学力との相関については、①学習に対する興味・関心②規範意識・自己有用感③学習の基盤となる生活・学習習慣について調査が行われました。

町内の児童生徒の学習習慣や生活習慣等の傾向

小学校6学年児童では、全国基準と比べて、「人が困っているときは、進んで助けに行く」「友達と協力するのは楽しい」について高い傾向にありました。

中学校3学年生徒では、全国基準と比べて、「家で自分で計画を立てて勉強をしている」「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」「毎日同じ時刻に寝ている」などについて高い傾向にありました。

改善の方向性

○「三つの柱」を育成していくことを重視し、確かな学力を確立するための学習活動を充実させましょう。

～知識・技能の確実な定着を図る指導の工夫改善に努めましょう～

- ・基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させるため、体験的な理解を重視した学習活動や、「まとめ」「振り返り」など学びをフィードバックさせる学習指導の工夫改善を図る。
- ・一人一人の習熟度等に応じたきめ細かな指導を一層充実させる。

～思考力、判断力、表現力等を高める指導を充実し、実際に課題を探究する活動の実践に努めましょう～

- ・観察・実験、レポートの作成、論述などの学習活動を発達段階に応じて充実させ、自分の考えを持ち、伝わりやすい言葉で文章を作る能力を向上させる。

○「主体的・対話的で深い学び」から学習意欲の向上につながる指導の工夫改善に努めましょう。

- ・児童生徒の学習意欲を高める「分かる授業」「自ら考える授業」の実践研究を推進し、児童生徒の自立性を促すことができるよう教師の授業力を高める。
- ・タブレット等のICT機器を活用し、児童生徒一人ひとりの学習場面が多様なものとなるように指導方法の充実を図る。
- ・地域の人材や加配教員による少人数指導、チーム・ティーチングや習熟度別指導など多様な指導によって児童生徒の学びを充実させる。

○家庭・学校・地域が相互に連携し、学習習慣や基本的な生活習慣の育成を図るための活動を充実させましょう。

- ・家庭においても日常生活の事象や体験から学びへと結びつけられるように疑問に対する興味関心を育てていく。
- ・子どもが自発的に学習を行えるように支援したり、規則正しい生活リズムの中で学習時間を確保したりなど、各家庭が意識をもって取り組む。

○読書に対する意欲を高め、読書活動を活発にする取組の一層の充実を図りましょう。

- ・全校一斉の読書活動、学校図書館の活用を通じて、文章の読解力を向上させる。
- ・毎月19日の「しみず読書の日」を意識して、読書の習慣化を図る。

清水町教育研究所との連携

調査の結果を受けて、清水町教育研究所では十勝教育研究所と連携し、教育課程や授業の工夫改善、家庭学習の推進に取り組んでいます。研究所の研究成果を参考に、各学校において日頃より実践研究に取り組むなど連携を図りながら、児童生徒の確かな学力の育成に努めます。